

機関番号：32631
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19530633
 研究課題名(和文) 児童養護施設入所児童の発達と可塑性—サクセスフル・アダプテーションを支える要因
 研究課題名(英文) The development and resilience of institutionalized children: factors underlying successful adaptation
 研究代表者
 向井 隆代 (MUKAI TAKAYO)
 聖心女子大学・文学部・准教授
 研究者番号：00282252

研究成果の概要(和文)：児童養護施設に入所中の児童を対象に調査を実施し、心理社会的側面の適応を支える要因を明らかにすることが本研究の目的であった。幼児期から小学校低学年まで継続してきたこれまでの調査では、語彙力や感情理解などの社会認知的能力の発達は入所児童では全般的にやや遅い傾向がみられているが、心理社会的に大きな問題を抱える児童はほとんどいなかった。また、対人関係の枠組みや家族イメージなども一般家庭の児童とは異なる傾向ではあるが、枠組みを柔軟に対応させている児童がほとんどであった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to understand the factors which support the psychosocial adaptation among children living in the institutional setting. The children have been followed up since preschool years till the early grades in elementary schools. Overall, the institutionalized children seem to be delayed in some aspects of socio-cognitive development, such as vocabulary and emotion understanding. However, to date very few of them have exhibited psychosocial problems. The institutionalized children hold different frameworks for affective relationships and family from those held by the comparison children, yet they seem to flexibly adapting their frameworks to their environment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：施設入所児童・心理社会的発達・可塑性・縦断的研究・適応

1. 研究開始当初の背景

発達初期に何らかの障害を持っていたり、生育環境に不利な要因が含まれていたりする子どもたちはリスク・グループと考えられている。これまでに諸外国で報告されている研究結果からは、複数のリスクを背負いながらもその半数以上の子どもたちは、特に大きな問題を抱えることなく人生を送ることがわかっている。つまり、当初のリスクそのものを除去することはできなくとも、リスクを跳ね

除ける力強さを子どもたちは持っている」と推察される。

海外においてリスク・グループの成長を長期間追跡した研究結果から、リスクを跳ね除ける力となる要因(保護因子)として、たとえば気質、知的能力、肯定的な自己像、自己効力感といった子ども本人の特徴や、養育者をはじめ家族内外の大人による支援、良好な仲間関係、学校の先生や先輩との関係、ロールモデルの存在などがあげられている。しか

し、日本においてはまだ研究が数少なく、特に施設入所児童などのリスク・グループを対象として、長期的な適応とその関連因子を検討する試みはほとんどなされていない。

2. 研究の目的

上記のような背景を鑑み、本研究では、児童養護施設に入所している児童を対象として長期縦断研究を行い、リスク・グループにおける主として心理社会的発達の様相をとらえるとともに、彼らの適応を支える保護因子を明らかにすることを目的とする。さらに、幼児期すなわち比較的早い時期における保護因子が成長とともにさらなる保護因子に結びついていく可能性や、後にストレスフルな状況に遭遇した場合の可塑性の基盤になる可能性についても明らかにしていく。

3. 研究の方法

研究協力の依頼に対し、書面による協力同意が得られた児童養護施設において、未就学児と担当職員を対象に面接調査と質問紙調査を行った。児童に対しては行動観察も行った。また、可能な範囲で、一般家庭で養育されている保育園児、幼稚園児にも同様の調査を実施し、施設入所児童との比較を行った。

基礎的情報の収集については、職員からの聞き取り調査もしくは児童票の閲覧等にて行い、個々の対象児童について生育歴等の情報も併せてデータベースを作成した。基礎的情報には、施設入所の経緯と生育歴のほか、入所時点での知能検査、発達検査の結果や発育状況、被虐待経験の有無を含む。

職員に対する質問紙調査では、担当児童の気質的特徴、愛着、問題行動と各種症状の有無について回答してもらった。特に問題行動は毎年度記入を求めている。

職員に対する面接調査では、子どもへのしつけ方略や発達期待をたずね、また担当児童がこれまでに経験したライフイベント等の聞き取り調査を行った。学業や仲間関係など学校適応、社会的適応の情報も収集した。

児童に対する個別面接調査では、語彙力、感情理解、コンピテンス（自己効力感）、対人関係の枠組み、家族イメージの測定をそれぞれ図版を用いて実施した。さらに、調査開始2年目から自己制御機能の課題を実施し、実行機能・認知的抑制など社会認知的側面の発達もあわせて検討している。

4. 研究成果

4年間の追跡調査を終えて、33名の施設入所児童のうち、学校適応や社会的適応に大きな課題を抱えていると考えられる児童は現時点ではごく少数であり、ほとんどの児童は、小学校への入学という発達課題に伴う環境の変化に適切に対応していると考えられる。し

かし、一般家庭で養育されている対照児童と比較すると施設入所児童間の個人差は大きい。対象児童数が限られるため、統計的な分析よりも質的な分析に重点をおいてきたが、これまでの研究結果から、主に下記のような成果が得られている。

(1) 対象児童の適応の様相について

語彙力、感情理解、自己制御の各課題においては、対照児童と比較すると、施設入所児童では全般的にやや発達が遅いことが示唆される。家族イメージや対人関係の枠組みも、一般家庭で養育されている子どもとは、かなり異なる特徴がみられている。しかし、他者に愛情要求をもたない児童はまれであり、職員や仲間への入れ替わりが頻繁であり安定しているとは言い難い状況の中で、さまざまな心理的機能を複数の限られた人物に割り振りつつ構築しているという点においては入所児童も対照児童と同様であると考えられる。

(2) 幼児期から児童期への適応を支える保護因子について

リスク・グループである施設入所児童の間での個人差に着目することにより、彼らの適応を支える保護因子を明らかにすることができると考える。すでに語彙力や知能指数などの知的水準の高さ、自己制御能力の高さ、情緒的安定性などは、小学校低学年の時点での問題行動の少なさや学業面や社会面でのコンピテンスと弱いながらも関連している。これまでに得られた結果から、おおむね海外の研究結果から予想された保護因子と同様な要因が日本の施設入所児童の適応に対しても保護的にはたらくことが示唆される。

(3) 今後の課題

小学校低学年までの間は、学業面においても心理社会的側面においても大きな課題を抱える児童は非常に少ない。しかし、今後学年があがるにつれ、子どもたちさまざまな課題に直面することが予想される。特に、青年期への移行期に自己肯定感を維持し、アイデンティティの確立につながっていく要因には、子ども自身の特徴だけでなく社会的サポートも重要であろう。調査を継続することにより、施設入所児童の青年期への移行を支える要因を明らかにしていくことが重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 齊藤千鶴・佐伯素子・向井隆代・目良秋子 児童養護施設及び入所児童をめぐる心理学的研究展望 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 査読無し 11, 2008, 29-40.

②齊藤千鶴・佐伯素子・向井隆代 幼児・児童
絵画統覚検査 (CAT) を用いた幼児の家族・
親イメージの実証的検討(1) 白百合女子大
学発達臨床センター紀要, 査読無し 10, 2007,
28-38.

[学会発表] (計 8 件)

①齊藤千鶴・向井隆代・佐伯素子・目良秋子
幼児における家族・親イメージの測定 (2)
日本発達心理学会第 22 回大会 2011 年 3 月
25 日 東京.

②齊藤千鶴・向井隆代・佐伯素子・目良秋子
児童養護施設で暮らすということの社会的評
価 (2) 日本心理臨床学会第 29 回大会 2010
年 9 月 3 日 仙台.

③佐伯素子・向井隆代・齊藤千鶴・目良秋子
児童養護施設入所児童の抑制機能と行動特徴
(1) —サクセスフル・アダプテーション要
因に関する縦断的研究より— 日本発達心理
学会第 20 回大会 2009 年 3 月 27 日 東京.

④齊藤千鶴・向井隆代・佐伯素子・目良秋子
幼児・児童期の家族ロマンスに関する検討
(2) 日本心理臨床学会第 27 回大会 2008
年 9 月 6 日 つくば.

⑤佐伯素子・向井隆代・齊藤千鶴 幼児期に
おける感情理解の発達—情動性および注意コ
ントロールとの関連— 日本発達心理学会第
19 回大会 2008 年 3 月 21 日 大阪.

⑥佐伯素子・向井隆代・齊藤千鶴 幼児期に
おける自他感情理解の発達を促す要因につ
いて—気質および注意のコントロールを中心
に— 日本心理臨床学会第 26 回大会 2007 年 9
月 28 日 東京.

⑦齊藤千鶴・向井隆代・佐伯素子 幼児・児童
期の家族ロマンスに関する検討(1). 日本心理臨
床学会第 26 回大会, 2007 年 9 月 29 日 東京.

⑧Takayo Mukai, Motoko Saeki, & Chizuru
Saito. Emotion understanding among
institutionalized children in Japan.
Poster presented at the 13th International
Congress on European Society for Child and
Adolescent Psychiatry, August 28, 2007,
Florence, Italy.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向井 隆代 (MUKAI TAKAYO)
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 00282252

(2) 研究分担者

佐伯 素子 (SAEKI MOTOKO)
聖徳大学・人文学部・講師
研究者番号: 80383454

(3) 連携研究者

齊藤 千鶴 (SAITO CHIZURU)
東京福祉大学・心理学部・講師
研究者番号: 20407597